

宇宙生命哲学

ことはじめ

79

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者

伊藤 俊洋

ハンブルグからの訪問者

友人のMさんは、ニューヨーク在住の日本人女性で、極限環境微生物学という領域の学会で親しくなった。この学会は、温泉・火山地帯・深海熱水噴気孔・塩湖・極地などの、人が生きて行くには不適切な環境で生きている生物について研究する学会である。学会行事が地球上の秘境と言われる場所で開かれることもある。Mさんは、人生の半ばで、生命科学の研究者から子供の教育システムの開発に転向された後、老年学の修士号を取られ、現在は、在米日系高齢者の介護ボランティアなどにも挑まれている。Mさんは多くの国に足跡を残され、多方面にわたる友人と親しくされている。

Mさんは、「宇宙生命哲学」の本質を深く理解され、海外の友人たちにもその概念を広く拡散して下さっている。今年の7月には、ハンブルグ在住のドイツ人夫妻と共にサイエンスカフェ・コスモスにきて、1泊して下さった。Mさんと同年代のご夫婦は共に60代で、夫のKさんは地球環境の磁気・磁場・磁力線などを測定する生粋の環境科学者である。妻のUさんは、精神セラピストとしてクリニックを経営している。子供たちが独立し、2人は仕事を続けながら世界を旅し、見聞を広めておられる。

当日、旅慣れた3人連れが、大型バックパックを背に玄關に現れた。ご夫妻は、今回、日本は初めてだそうだが、すでに熊野古道の半分を踏破されてきたので、日本での生活にも慣れておられるようで、不自由さはみられなかった。箸の使い方は練習してきたと、Kさんはその成果を嬉しそうに披露された。カフェの庭にセットした地球と月の模型、雨水を利用したビオトープ、自宅近くの「地球人公園」、地域住民の交流の場である「自治会館」、自宅の屋上のトレーニングスペースな

どを案内したのち、「宇宙生命哲学」のレクチャーをした。演示実験も交えて、地球上の生命現象は、基本的に化学反応であり、地球上の全ての生命

は、原子論的には過去から現在へ、さらに未来へ循環する高次元巨大環境生命体の構成員であることを述べた。現在の人類にとって「地球人」という概念が必要であることを強調し、共感を得ることが出来た。「宇宙生命哲学」を説明するときの必須教材であるアースボールをプレゼントすると、ハンブルグのオフィスに飾ると、大変喜んでくれた。翻訳機の性能が向上したとはいえ、近い将来、少しはドイツ語を学んでから、ハンブルグを訪れたいものである。



宇宙生命哲学に関心を示してくれた友人達
ハンブルグとNYから相模原へようこそ